

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花

作者未詳

「難波津に咲くよ、この花。冬は隠れていたが、今はもう春と咲くよ、この花」。『古今和歌集』仮名序では、「歌の父母」として、掲出歌ともう一首、次の歌をあげている。

安積山かけさへ見ゆる山の井の浅くは人と思ふものか
は

「安積山の姿さえも映す山の清水。その浅い清水のよう
に浅い心で私は思っているわけではありません」。

この二首がなぜ「歌の父母」なのか。仮名序には「二歌
は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の初めにもしける」と記されている。海（難波津）の歌と山（安積山）の歌を一組の父母と見立て、文字を習得するときの手習いのために利用したという。実際、リフレインの効果もあって覚えやすい「難波津」のほうは法隆寺五重塔初層の天井組子や、平城京跡から出土した木簡への落書きが見つかった

いて、役人に限らず広い階層の人々に知られていたらしいことがわかる。

『源氏物語』「若紫」の巻にも、「歌の父母」二首は登場する。療養先の北山で垣間見した幼い少女の紫の上のことが忘れられない源氏は、祖母である尼君へたびたび歌を贈り、どうにか紫の上からの返事が欲しいと粘る。

あさか山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るら
む

あさか山の清水のように浅くあなたを思っているわけでは
ありません。それなのに、あなたはもうして山の井に映
るかげの、かけ離れた心しか持つてくださらないのか、と。
この歌は、尼君からのさきの返事に「まだ『難波津に咲く
やこの花……』の手習いをすら、まともには書き続けられ
ぬくらい幼き者にて」とやんわり断られたのを踏まえて
いる。「難波津」から引きだされた「安積山」の歌の言葉
を下敷きしながら、同時に「あなたを深く思っているの
す」という元歌の意味をも、しつかりと込められているの
がさすがである。

（小島なお）

